

「具体」から「抽象」へ

関連入試（二〇一六年・東京農業大学）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

さて、孤独が創作に不可欠な「ア」だという理由は何だろうか。

経験的にはわかっていても、その理由を「I」的に証明するのは難しいと感じる。脳科学なのか心理学なのかわからないが、そういう傾向が人間の頭にはある、ということしか今の僕にはわからない。

この傾向は昔から「ケン」著だったはずである。芸術の多くは宗教と深いつながりがあったけれど、それは、芸術の感動を宗教が利用したという以上に、人々が神秘的なものの中に、より崇高な美を見ようとしたりしたからにはかならない。この神秘的とは、きわめて個人的な主観が基本にある。何故か心を打たれる、というものに触れたとき、それは神の力だと体感した。また、孤独から逃れるためにも神が必要だったわけで、「A」宗教への傾「トウ」は、孤独感から発するものだと考えられる。

ところで、日本には、わびさびの文化が古来あるわけだが、ここに見出されるのは、寂しさに美を見つけるその繊細かつ鋭敏な感覚である。西洋の文化では、ほとんどメインとならなかったのが、特に哀れみに美を見る目だろう。東洋であっても、中国や朝鮮半島には、この種のものはいくつか少ない。古いものこそ美しい。散りゆく落葉が美しい。朽ちていくものに、単なる哀愁だけでなく、最上の「美」を見つける精神である。

西洋や中国などでは、古い時代の建築物は、建てられた当時の状態に復元される。しかし、日本ではそういったことはほとんど行われない。京都の金閣寺や日光の東照宮は例外かもしれないが、基本的に日本人は「古さ」を伴う風情を好む。金箔のびかびかの状態よりも、それらが剥げ落ち、くすんだ色調になった状態を、良いものだと感じる。これも、わびさびの文化の名残だろう。そもそも、金閣寺と対を成す銀閣寺が、それを「II」したものだ。銀箔でできているわけではない。

こういった一見すれば明らかに「寂しい」対象に美を見る精神は、何故生まれたのだろうか？ それは実は逆であって、「寂しさ」を感じる精神こそが美しいという意識がさきにある。つまり、寂しさを求める気持ちだが、既に美しいものだ、という思想なのである。もう少しわかりやすく解釈すれば、古いものに目を向ける。朽ちゆくものに目を留める、そういった指向こそが、美を見つける心だ、という意味だ。豪華絢爛の煌びやかなものだけが美ではない、という反発もある。むしろ、それを超えるさらなる美を、見つけようという精神が到達した一つの極みといえる。

古いものといっても、それは自然ではない。自然にはそもそも新しいも古いもない。常に変化をし常に新しくなっている。百年まえの自然はどこにもない。「古い」というのは、人間が作ったものに対する形容なのだ。同時にそれは、今はこの世にいない過去の人間が作ったものがあり、人が消えても残るものの価値、あるいは、「イ」人生の短さというものへ目を向けさせる。

人はいずれは死ぬ。それは究極の「寂しさ」だろう。孤独とは、つまりは死への連想でもある。死ねばもう誰とも話ができない。誰にも会えない。この世から自分だけが隔離され、なにも見えなくなり、誰にも認められない状態になることだ。「B」、何人もそれを免れることはできない。拒絶しても、必ず訪れる。

そういったものから目を逸らすのではなく、逆に目を向け、そこに美を見出す精神というのは、この人類最大の難題を克服する唯一の手法だろう。芸術とは、最大の不幸を価値あるものへと変換するものだ、という逆転は、ここにその極致を見ることが出来る。

考えてもみてほしい。友達大勢と騒いでいるとき、酒を飲んで踊ったり歌ったりしているとき、貴方はどんな「美」に出会えるだろう？ それは、せいぜい、ちよつと気になる美人を見つけた、という程度のものでしかない。そもそも、それも確率は少ない。「C」、パーティーの「ケン」噪から少し離れ、ふとバーカウンターの端、暗いところに寂しく座っている女性の方が美しく見えることだろう。多分にこれは、ヤラセ的な悪い例だったかもしれない。小説家が「捏造する美など、その程度のものだ。

それよりも、夕暮れの田舎道を一人歩いているとか、苦勞をして辿り着いた山の頂上とか、あるいは、しんと澄み渡る星空へ望遠鏡を向けるときとか、そんな寂しさや静けさの中に、得難い美しさを見つかる機会の方がはるかに多いはずである。それがわからないという人は、たぶん、「ウ」本当の美しさを知らない、美しさを見つかる目がないのだ、と僕は思う。パーティーで異性ばかりを追いかけている人間には、一生わからないものかもしれない。もちろん、そんな人生も良い。人は例外なく老人になって人生の虚しさに直面するのだから、いずれはこの究極の美を見ることが出来る。早いか遅いかの違いである。

変な話だが、「D」、風景を見て美しいと感じるのは年寄りの方が圧倒的に多い。若者は、風景なんかに興味がない、という人が多いはずだ。特に子供だったら、紅葉を見にいつもまったくつまらない。大人が「うわあ、綺麗だねえ。ほら、綺麗でしょう？」と言うから、しかたなく同調して「良い子」を演じているにすぎない。

年寄りが、風景に美を見るのは、おそらくは自分の死を身近に感じているからだろう。「この景色をあと何度見ることが出来るか」というセンチメンタルな感情が加味されるからこそ、美しく見える。なんでもないとところに美を見つける目は、人の儚さから生まれるのである。

このような自然な美、シンプルな美、質素な美というものは、「成熟」が成せる逸品だと思われる。①時代が若いときには、美しさとは飾るものだったはずだ。②豪華絢爛、宝石や金銀をちりばめ、過剰なまでに装飾を競った時代があった。これは、西洋でも東洋でも、もちろん日本でも同じである。また、建築でもファッションでも工芸品でも同様の傾向が見られる。③こういった豪華な美しさというのは、誰の目にもわかりやすい。とにかく、飾りが多いほど、細かいほど、手間がかかっているほど、つまりは金がかかっているほど上等だ、という道理だから、比較も簡単だ。④

ここへ来て、人々は考えるだろう。「美」とは何なのか、と。とにかく手間をかけ、金をかけ、飾り立てることだろうか。そんなものではたして美が体现できるのだろうか、と。⑤

この反動から、シンプルなもの、むしろ飾らないものが美しいという逆転の発想が生まれる。たとえば、建築であれば、コンクリート剥き出しの「打ち放し」が愛されるようにもなる。「構造美」という言葉も生まれ、力学的に均整が取れた形、その骨組み自体を隠さずに見せるようになる。あるときには、スケルトンといって、内部の構造が見えるようなデザインまで現れる。飾らないことから始まり、隠さないことにも至る。表面を覆っていたものをさえ剥がされていく。それはまるで、長い時間経過によって金箔や塗装が剥がれ、風化し朽ちて、その内にある下地の本体を晒すようなものであり、古いものに美を見る心にも通じる。派手な塗装が美しいのではない。それはむしろ本来の美しさを隠す目眩ましではなかったか、という反省なのだ。

現代人の多くは、<sup>エ</sup>この心を知っている。日本人でなくても西洋人も既に、その質素な美に親しんでいる。かつて、<sup>升</sup>密に描かれていた絵画は、印象派のぼんやりとしたものになり、さらにもっとシンプルな現代絵画へ移行する。女性のファッションだって、現代では十二単やクラシカルなドレスの類は流行らない。宝石を沢山飾っていると悪趣味だと言われる時代になった。

現代の美は、デコレーションが美だと認識していた昔の人間の目には、明らかに「寂しい」ものに映るだろう。どうしてそんな寂しいものを愛するのか、と理解に苦しむにちがいない。このように、「孤独」や「寂しさ」の価値がわからないという人は、そんな古い感覚に縛られている、ともいえるだろう。

「賑やかさ」から「寂しさ」へのベクトルは、「洗練」でもある。そこを推し進めるのは、「成熟」であり、今風の表現で言えば、<sup>オ</sup>「大人の美」なのだ。

(森博嗣『孤独の価値』による)

問一 傍線部ア「フアクタ」の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 概念
- 2 障害
- 3 情念
- 4 要素
- 5 契機

問二 空欄 **I**・**II** に入る語として最も適当なものを、次の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

- |    |       |      |      |      |       |
|----|-------|------|------|------|-------|
| I  | (1 実践 | 2 科学 | 3 根本 | 4 潜在 | 5 主観) |
| II | (1 象徴 | 2 捨象 | 3 具象 | 4 淘汰 | 5 示唆) |

問三 空欄 **A** **D** に入る語として最も適当なものを、次の1～6のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

- 1 しかも
- 2 しかし
- 3 つまり
- 4 たとえば
- 5 むしろ
- 6 なぜなら

問四 傍線部イ「人生の短さというものへ目を向けさせる」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 古くから常に変化し常に新しくあり続ける自然との対比で、人の一生は儂く短いものだと思いを抱かせるようになるから。
- 2 人の短い一生の中で作られた「古い」ものは、人が死してもなお、死という最大の不幸を通して美という価値あるものとして残り続けるから。

- 3 短い一生の中に見出す美は、朽ちて長くとどまる古いものの中に見出す美に比べ、その儂さゆえに、より美しいと感じられるため。
- 4 金閣寺や日光東照宮のように、修復されながら長い間煌びやかさを保つものがある一方で、短い一生の中にも輝きを見出すことができるため。
- 5 人間が消えても残るように復元をし、常に新しさを保ち続ける行為は、歴史の長さや人の一生の短さを考えることと同義だから。

問五 傍線部ウ「本当の美しさを知らない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 美と深いつながりのある宗教というものの中に、日本は神秘的なものを見出そうとしないから。
- 2 豪華絢爛で煌びやかなものや賑やかさが「美」というものだと思いついているから。
- 3 この世から自分だけが隔離されるという「死」というものを否定しているから。
- 4 賑やかさや華やかさという環境の中にあり、人生の虚しさや向き合ったことがないから。
- 5 大人に同調し「良い子」を演じ続けてしまい、「美」を感じる心を失ってしまったから。

問六 傍線部エ「この心」とはどのような心か。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 飾らないものが「美」であるという逆転の発想自体を美しいと感じる心。
- 2 飾らないことではなく隠さないことが「美」に通じると感じる心。
- 3 本来の美しさを隠すために派手な塗装をしていたのだと反省する心。
- 4 派手なものではなくシンプルで飾らないものが美しいと感じる心。
- 5 金箔や派手な塗装が剥がれていく長い時間の過程が美しいと感じる心。

問七 傍線部オ「大人の美」とはどのような美か。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 長い時間の経過によって風化もせず、朽ちることなく残された、老成している美。
- 2 古くくすんだ色調になった、大人が好む印象派の絵画のような、流行にのらない美。
- 3 年を重ねるからこそ知ることのできる、「孤独」や究極の「寂しさ」の中に見出される美。
- 4 手間はかかっているが装飾過剰な状態ではない、飾らないシンプルで強靱な美。

5 長い時間経過の末残っていく、「古い」自然の中に見出される「成熟」した美。

問八 次の文の入るべき箇所を、本文中の①～⑤のうちから一つ選べ。  
そして、どんな 에스カレートして、最後は裝飾過多、てんこもりのような醜さに至る。

問九 傍線部 a～e について、d は漢字の読みを、a・b・c・e はそのカタカナにあたる漢字を、次の各群の 1～5 のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

a	ケン著	(1	権	2	縣	3	頭	4	驗	5	憲)
b	傾トウ	(1	投	2	膳	3	淘	4	踏	5	倒)
c	ケン噪	(1	謙	2	見	3	喧	4	堅	5	険)
d	捏造	(1	めつぞう	2	ねつぞう	3	しょうぞう	4	こうぞう	5	びぞう)
e	刊密	(1	智	2	致	3	弛	4	稚	5	緻)

	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九
	4	I 2	A 3	2	4	4	3	④	a 3
		II 3	B 1						b 5
			C 5						c 3
			D 4						d 2
									e 5

【解答】

【解説】

問四 直後で「死」という「究極の『寂しさ』」に言及し、そのような「寂しさ」から「目を逸らすのではなく…そこに美を見出す精神」について触れ、「芸術とは、最大の不幸を価値あるものへと変換するものだ」という逆転の発想を評価している。よって2が正解。

問五 あとに「人は例外なく老人になって人生の虚しさに直面するのだから、いずれはこの究極の美を見ることができるとある。逆に言えば、「パーティーで異性ばかりを追いかけている人間」はまだ「虚しさ」を知らないということである。よって4が正解。

問六 直前の段落の冒頭に、「シンプルなもの、むしろ飾らないものが美しい」という逆転の発想が生まれる」とある。あとにも「その質素な美に親しんでいる」といった表現が続いているので、4が正解。

問七 直前の段落の「寂しいものを愛する」「『孤独』や『寂しさ』の価値」という表現に着目すれば、3が正解だとわかる。4は「手間はかかっているが」が不適。